MEMORY

立花　美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＥＭＯＲＹ

【Ｎコード】
Ｎ８８８９Ｚ

【作者名】
立花　美月

【あらすじ】
結婚したばかりの詩緒は幸せな毎日を送っていた。しかしある日、目の前で夫・晃が事故に遭い突然帰らぬ人となってしまった。傷心のうちに通夜と葬儀が終わり、気を失うように深い眠りへと落ちていった。不思議な夢を見た後、目を覚ました詩緒は記憶をなくしていて……＊＊＊ＨＰにて先行連載中の作品です。続きが気になる方はそちらをどうぞ。＊＊＊

第一話

『愛してるよ。もう二度と君を離さないからね』

太陽の光が煌めき、鮮やかな花が咲き乱れる教会でふたりは永遠を信じ、変わらぬ愛を誓った。

大きな瞳に溜まる涙が光に反射してキラキラ輝いていた。彼女の笑顔が眩しすぎて、こんなに幸せでいいのだろうかとなぜか恐くなった。

君がいたから僕は愛を知った。なのに、僕は君に何をしてあげられるのだろう――――

＊＊＊

結婚式を終えたというのに、ウェディングブーケのデザイン画と睨めっこをしている姿が見える。デスクにはいくつかの写真が広げられ、それらを肘をつきながら交互に見ている。右手に持つペンは書くという役目を果たさず、指の上でクルクルとまわっていた。

これといった決め手がなく、満足のいかない出来に頭を抱えているのは一ノ瀬詩緒（イチノセシオ）である。彼女は客である新婦から指定された花の写真を何度も見ては溜め息を吐く、といった行動を繰り返していた。

「詩緒、少し休憩したら？」

先ほどから唸っている姿を見ていた夫の晃（アキラ）は、彼女のことが放っておけなくなったのかコーヒーの入ったカップを持ってデスクの前までやってきた。とはいえ、デスクの上にカップを置くようなスペースはなく詩緒が手を差し出すまで持っているしかない。

そのカップから立ち上る湯気と香りに、彼女の張り詰めていた神

経も緩んだのか、視線はデザイン画から夫へと向けられた。

「あぁ、ありがと」

眼鏡を外し手渡されたカップに手を伸ばした。少々根を詰めすぎたのか、長時間水分も摂らずに作業していたことに気が付いた。晃の気配りなのかいつもに比べてミルクの量が多い。そしてほのかに甘く感じるのも詩緒の疲れを癒すために入れられた砂糖のせいだ。

「今回はずいぶん悩んでるね。そんなに難しい依頼なの？」

そう言って覗き込むと、何枚かのデザイン画を手にとって見た。一通り見てみるが晃は首を傾げるばかりだ。彼にとってはどれも同じように見えるのか、感想を言おうにもいい言葉が見つからない。

どれをとっても中心に大きな花があり、それを取り囲むように色とりどりの花が囲んでいて小さなリボンが散りばめられていることには違いがない。

「特に難しいってわけじゃないんだけど、使いたい花が多すぎてうまくまとまらないの。ほんと、まいっちゃうわ」

「だったらもう少し大きくすればいいんじゃないの？」

「ほんとはそうしたいけど…彼女、あまり背が高いほうじゃないからそうもいかないのよ。バランスが取れなくなっちゃうでしょ？」

そんなものなのか、と自分にはわからない世界があるのだと思いながら妻の言い分を聞いていた。

詩緒がこうして仕事に対して悩んでいる姿は珍しい光景だ。

彼女は幼い頃から花に囲まれて育ち、知らず知らずのうちに花に関わる仕事がしたいと思っていた。両親が生花店を何店舗か経営しているため経済学部に進学しようかと相談したところ、父から返ってきた言葉は意外なものだった。

花をただ売るだけの仕事はしてほしくない――――

当時、何件か依頼のあった結婚式場でのフラワーデザインやブーケの注文を知った詩緒は何か心に響いたものがあった。そこでデザインの専門学校に進学しフラワーデザイナーとなったのだ。

仕事は主にレストランを中心とした結婚式の担当で、会場の花やブーケのデザインなどを手がけている。挙式当日までにデザインを考え、新郎新婦に提案しＯＫが出れば当日に何人かのスタッフと会場入りする。

晃と出会ったのも結婚式場でのことだった。

彼が担当する挙式で最初の打ち合わせの場所で顔を合わせた。その時にお互い一目惚れのような衝撃を受けたのが始まりだ。そして二年の交際を経て三ヶ月前に式を挙げたのだ。

「たまには気分転換したら？　最近ずっとその仕事のことばかり考えてるんだろ？」

「んー、でもあんまり日にちもないから…」

「ちょっとだけだよ。明日は仕事が早く終わりそうだから外食なんてどう？　何かひらめくかもよ」

完全に煮詰まっている詩緒に対して打開策と呼べるようなものは持ち合わせていない。それでも黙って見ていることができない晃の精一杯の気配りだった。

「…そうね、それもいいかもね」

しばらく沈黙があったが、ここで唸っていても何も変わらないと思ったのか手元のデザイン画を片付けながら言った。

「よし、じゃあ決まり。明日の昼にでも予約取っておくよ。何が食べたい？　どこか行きたい店とかある？」

言うが早いかデスクのラックから何冊かの雑誌を取り出すと嬉し

そうな顔をしながらパラパラとめくり始めた。まるで初めてデートに行くようなはしゃぎようだ。

自分たちの結婚式を終えてから季節はすぐに世間一般の挙式シーズンに入った。そのためふたりはまとまった休みが取れるはずもなく新婚旅行はおろか、外出らしいこともしていない。

特に詩緒はオンシーズンにもなると休んでいる暇がないのだ。わずかでもふたりでいられる機会は大切にしなければとしみじみ感じていた。はしゃぐ夫の姿を見ながら恵まれた新婚生活に幸せ一杯だった。

家で仕事をしていても嫌な顔ひとつせず、詩緒を応援してくれて、友人に話せば羨ましいという言葉が返ってくる。この人に出会えて本当によかったと感謝していた。

この幸せな日々は永遠に続くものと信じてやまなかった。

そう…

あの事故が起こることを、このときはまだ知る由もなかった――

―

第二話

「じゃあ、後はよろしくね」
その場にいたスタッフに声をかけると、詩緒は自分のデスク周りを片付けて事務所を後にした。

両親が経営している会社だが、実質ウェディング部門を管理しているのは詩緒本人だ。スタッフもすべて詩緒が人選しデザイン部と技術部に分かれている。
最近は受注が増えてきたこともあり、デザイナーは詩緒以外に3名いる。小さな事務所の中でお互いに知恵を出し合い、人生最高の舞台に最高の花を添えようと考える者ばかりだ。

廊下に出てそのままエレベーターに乗ろうとしたがふと足が止まった。
なぜだか分からないが今来た道を戻り、事務所の前を通り過ぎた。一番奥の部屋の扉の前で立ち止まる。軽くノックをして中へ入った。

「どうした？　珍しいじゃないか、こんな時間に」
書類整理をしていた父は少し驚いた様子だ。
「たいしたことじゃないの。ごめんね、仕事中だったわよね」
「いや、それは構わないが」
「今日はもう上がるから、なんとなく顔を見に来ただけよ」
自分でもなぜ引き返してまで来たのか、理由は思いつかなかった。ただ、気まぐれに寄ってみただけだと言いこの後の予定を話して部屋を出た。

晃との待ち合わせまではまだ時間があった。こうやって仕事以外で外出するのは久しぶりだ。駅前の商店街を目的もなく歩き、最近

できたらしい真新しい一軒のカフェに立ち寄った。
見慣れた風景が少し変わっている、今さらながら仕事漬けの毎日だったことに気が付いた。この三ヶ月間、職場と家との往復だけだったのだ。
もう少しすればまとまった休みが取れるようになる。オフシーズンともなると仕事量が激減するので、今のうちに一件でも多く取っておきたいのだ。

「いらしゃいませ」
店内は平日の夕方だというのに割りと混み合っていた。今話題になっているのかもしれないと思いながら窓際のカウンター席に座る。
商店街とは反対側の大通りに面している窓からは紅く色づいた街路樹が見える。その隙間からは見える空は厚い雲に覆われていた。詩緒が事務所を出た頃はまだ陽が射していたのに今にも雨が落ちてきそうな色合いだ。薄暗い空を見ながら傘を持っていない夫のことを心配していた。

食事の前だったがコーヒーとケーキのセットを注文して、かばんからケータイと何冊かのパンフレットを取り出した。
新婚旅行の候補地であるパンフレットで、挙式前から悩んでいることだった。どこでもいいよと言う晃に対し詩緒は行きたいところが多すぎて絞れない状態だった。だが、そろそろ決めておかないと都合もあるのだ。
最終候補地を三ヶ所ほどに絞り、食事のときにでも晃と相談しようと考えていた。新婚旅行でなくともオフシーズンになれば海外旅行には行けるのだからと、自分に言い聞かせた。

ケーキを食べ終わった頃、ケータイの振動が伝わってきた。画面を見るとメールのマークが点灯している。送信相手は晃で内容は少し遅れるというものだった。

「仕事じゃ仕方ないもんね」
返信ボタンを押し内容を打ち込みながら、冷めたコーヒーを口にした。

約束の時間から三十分ほど過ぎた頃、今度は電話がかかってきた。
『遅くなってゴメン、今どこにいる？』
「駅前の新しくできたカフェにいるけど…今会社出たところ？」
『あぁ、じゃあそこで待ってて』
「いいよ、そっちにいこっか？」
そう言うと大丈夫、と電話が切れた。どんなに急いでもここまで来るのに十五分はかかるだろう。時計と窓の外を交互に見ながら夫の姿を待っていた。

道路の奥の歩道に晃らしき姿を捉えるとほぼ同時にケータイが鳴った。
『もうすぐ着くよ』
「うん、お店の外で待ってるね」
詩緒はパンフレットを片付け席を立った。

晃は赤になってしまった横断歩道の一番前でケータイを片手に待っていた。交通量が多い交差点のため信号がなかなか変わらない。
会計を済ませて店を出ても詩緒のほうが早い。「ありがとうございました」という店員の声を背中で受け大通りへと出る扉を開けた。

信号が青に変わるカウントダウンが始まった。交差点の手前まで来た詩緒は今いた店に傘を忘れてきたことを思い出し慌てて引き返した。
止まっていたいた人が流れ出したのを感じ、急いで店内を後にする。店から一歩出たところで誰かの「きゃーっ」という悲鳴が聞こえてきた。

悲鳴が聞こえてきた方を見ると交差点の中で何人もの人が倒れていた。信号機には鉄の塊がもたれかかっていてそれが動かなくなった車だと理解するまでに数秒かかった。
地面には血の跡が無数に飛び散っていて、先ほどまで見ていた日常と同じものとは思えなかった。辺りは悲鳴とざわめきで混乱していたが、詩緒はただ呆然と立ちすくんでいた。

「誰か！！！　救急車っ！！！！」

その声だけがはっきりと耳に入ってきて、ふと我に返った詩緒は晃を探し始めた。

「あ、晃！！！　どこ！？」

人混みをかき分けて交差点の中へと入ろうとした。

「あき――――…」

道路の真ん中で倒れている夫の姿が目に入った。慌てて駆け寄るがピクリとも動かない。見ると後頭部の辺りから大量の血が流れていることに気が付いた。

「い、いやーっ！！！」

夫の身に何が起こったのか理解した詩緒は、その絶望的とも言える現状のなか狂ったような叫び声を上げた。もう何も耳に入ってこない。

遠くの方で救急車のサイレンが鳴り響いていたが、それすらもどこか違う世界のもののようだった。

第三話

どれくらい時間が経ったのだろう。
詩緒は傷ついた夫と共に救急車に乗せられていた。乗り合わせた消防署員に名前に年齢、血液型や連絡先などを聞かれたがうまく話せたのか自信がなかった。
事故現場に現れた救急隊は瞬時に状況を判断し、重症だと思われる患者から搬送し始めた。晃も応急処置を施されながら救急車に乗せられた。
当然、すぐにでも病院へと向かうのだと思っていた。だが、現場を離れてからもかなりの時間を車内で過ごし、晃の手を握りながら詩緒の体は小さく震えていた。

この事故のせいだけではない。
どの病院も手一杯らしく受け入れ先の病院がなかなか見つからなかった。切羽詰った声で嘆願する署員と今は難しいと答える救急センター。そのやり取りが何度も何度も繰り返され、同じ道を何度も通っている。まるで出口のない迷路に踏み込んでしまったようだ。
やっとの思いで受け入れ先が決定したのは実に七ヶ所目で、事故から一時間以上が経過していた。誰でもいいから助けて欲しい。その思いを胸に慌しい廊下でひとり待っていた。

「…手を尽くしましたが、助かりませんでした」

担当した医師が弱々しく告げた。
そのときばかりは時間が止まったように静かで、医師の言葉が大きく響いて聞こえた。
続けて「もう少し早ければ」「できる限りのことはしました」「

とても残念です」と言葉を並べたが詩緒の耳には届いていなかった。もう二度と夫の笑顔を見ることはないのだと、そのことだけが頭の中を巡っていた。

何も言葉は出なかった。

しばらくして事故を聞きつけた両親が到着した。詩緒は張り詰めていた糸が切れたのか、母親の顔を見るなりその場に泣き崩れた。その瞬間がすべてを語っていた。

立っている気力もない詩緒は、両親に抱きかかえられながら病院を後にした。

後日、警察から事故の経過を聞かされた。

と言っても詩緒が対応できるわけもなく、代わりに話を聞いたのはそれぞれの両親だったが。車を運転していたのは二十代前半の男性で、ケータイを触っていたのか赤信号に気が付かなかったようだ。

確信が持てないのは運転手本人も死亡しているため、まだはっきりとしたことが言えないらしい。ニュースなどでよく聞く交通事故の話だ。まさか自分たちに関わるなど夢にも思っていなかった。

横断歩道の列に突っ込んだため死傷者は十五名、うち死者が五名も出た大惨事だった。その五名の中に晃は入ってしまったのだ。

まだ現実を受け止めることのできない詩緒にとって、この事故の過程を知るのはまだまだ先の話だった。

＊＊＊

「…詩緒、疲れてない？　無理しなくていいのよ？」

「ここはもういいから、控え室で休んでいなさい」

事故から三日後、まだ心の整理もできていないうちに通夜が執り

行われた。会場の手配から参列者への挨拶など、本来なら詩緒がやらなければいけないことだが、とてもそんな状態ではなく晃の両親、特に父親が先頭に立って仕切っていた。
喪服に身を包み前列でただ座っているだけの詩緒はまるで人形のように無表情で、蒼白い顔をしていた。
人の流れが途切れた頃を見計らって、控え室へと連れて行かれた。自分ひとりでは歩くこともおぼつかない状態だ。

何も考えられなかった。
頭も心も空っぽで、本当にこれが現実なのかと思うだけ。
そして次第に心は「後悔」という暗い影で覆いつくされていく。

あの日、あの場所にいなければ。

そんなどうにもならない思いだけが押しては引く波のように脳裏を駆け巡っていき、詩緒の心は崩壊寸前だった。
通夜が終わった後、薄暗い室内で棺に入った夫の顔をそっと覗き込んだ。もう触れることはできない。だが、その表情はただ眠っているようにしか見えず今にも起きてきそうだ。遺影の中の笑顔と同じ顔で「びっくりした？」などと言って詩緒を驚かせても不思議ではない。

「お願いだから目を覚まして…」

答えるはずもない夫の前で、止まっていた涙は再び頬を伝い始めた。小さな雫が棺の上に落ちていく。ぼんやりと滲む視界の先は世界が歪んでいるようにも見えた。
涙の落ちる音と、押し殺した泣き声だけが暗い闇を彷徨うように響き始めた。

翌日の葬儀。
空は憎らしいほどに晴れ渡り、まるで詩緒の暗い心をあざ笑うかのような空模様だった。せめて雨でも降ってくれればその中に紛れ込み泣くことができるのに。

参列者は前日の通夜より多く、それに比例して同情の声がより一層聞こえてきた。「無理しないでね」「何でも言ってね」「できることはするから」そんな励ましの言葉も今の詩緒には意味がなく、ひとつも心に響かなかった。会場から一歩外出でれば「かわいそうにね」という他人事のような台詞が口をついていたからだ。

皮肉にも詩緒が好きだった白い花に囲まれて顔だけが見える夫は人形にしか見えなかった。最期のお別れと頬に触れてみたがすでに悲しみの底にいるためか何も感じなかった。
遺影を持って閉じられた棺と共に火葬場へ行くと気丈だった晃の両親も涙ぐんでいた。無理もない、まだ二十八歳という若さで親よりも先に逝ってしまったのだから。

詩緒は不思議と涙は出なかった。もう散々泣いたからだろうか、涙が枯れてしまったような気がして外に出てからもぼんやりと空を眺めているだけだった。
どのくらいそうしていたのだろうか。火葬場の煙突から灰色の煙が天に向かっていた。夫の魂もあの煙と共に昇っているのだろう。ふとそんなことを思った。

愛しい人が灰になった瞬間だった。

第四話

その夜、無言のまま帰宅した詩緒は気を失うかのように眠りについた。本当なら遺骨を持ってマンションに帰り一刻もひとりになりたかったが、両親がそれを許さなかった。

葬儀では涙ひとつ見せず気丈に振舞っていたが、それがかえって危なっかしくお互いの両親が話し合った結果、しばらくは実家で様子をみようということになったのだ。

「今夜はゆっくり休ませましょう」

「あの子まで倒れなければいいが…」

無表情、無反応だったが喪主としての役目は無事果たした。しかし悲しみはじわじわと迫ってくるもので、ここからが本当に辛い日々の始まりかもしれないのだ。

詩緒のことを心配しながらも、いつの間にか話題は晃のことに切り替わっていった。お互いの両親がリビングで思い出話に浸っている頃、詩緒は夢の中に身を置いていた。

誰も入ることのできない深く静かな世界。そこは何もない真っ白な空間だった。

いつからそこにいたのか、ここがどこなのかもわからない。

ただ真っ白な世界が広がっていて、前も後ろも検討がつかなかった。ぼんやりと座っていた詩緒は突然立ち上がりゆっくりと足を動かしてみた。

どこへ向かっているのかもわからないが、無意識のうちに動く足。はっきりとした目的があるわけではないが「何か」が待っているような気がして、夢中で歩き続けた。立ち止まるという選択肢はなかった。

しばらく進んでいると見覚えのある後姿に遭遇した。気のせいかもしれないと、何度か目をこする。輪郭はひどくぼやけているのに直感的に自分の会いたかった人だと、さらに近付こうとした。
しかしどれだけ歩いても一向に距離は縮まらない。それどころかかえって離れていっているようだった。こちらの気配には気が付いていないのか、彼は振り向こうとすらしない。
呼び止めようと思わず声が出た、「……晃」と。

それは想像していたような音量ではなった。かすれたような声が相手に届くわけもなく、前を歩く彼の影は小さくなり次第に見えなくなってしまった。白い空間にひとり取り残された。
またひとりになってしまった、と思った途端歩くのをやめた。もうどこに行っても意味がないような気がしてひどく投げやりな感情だけが心を支配していた。

「……もう、疲れた」

大切な人に置いていかれた、ただそれだけが悲しくて気が付けば泣いていた。大粒の涙を流しながら。自分がいる世界にはもう何もないと思っていた。その時だった。
不意に人の気配を感じて顔を上げた。背後から視線を感じ振り返った。

「…誰…？」

すぐ傍で感じた視線だったが、実際にはかなり離れたところに立っていて顔はよく見えなかった。漠然と知らない人だと結論付けた。

「私をここから出して…」

手を伸ばし立ち上がろうとした。が、何かが足に絡まっていてうまく立ち上がれない。そうしているうちに目の前の「彼」は無言で立ち去ろうとしていた。待って、行かないで。そう言おうとしたが声にならない言葉が伝わるはずもなく、その姿は見えないほど小さくなった。

足に絡まっていた何かが外れたと思った瞬間、目の前の光景が変わっていった。

そこに真っ白な世界はなく、窓からは眩しい光が射しこんでいた。自分は何か夢を見ていたのだと思ったがどんな内容だったか何も思い出せなかった。不思議な感覚だけが残っていて、いまだ夢と現実を行き来しているかのようだ。

「…あれ、誰だったんだろう？」

確かにいた「ふたり」に見覚えがなかった。気分が優れないと頭を振ると余計に響いた。何か錘が乗っているような鈍い痛みが詩緒を苦しめていた。さらに座っているのに眩暈がして視界がグラッと揺れた。

両手で頭を抱え込むようにしていると扉をノックする音が聞こえた。「入るわよ」と丁寧な口調でドアを開けたのは詩緒を母親だ。

しかし、詩緒はその姿を見るや否や体を硬直させ目を見開いた。

「あら、まだ寝てるかと思ってたけど起きてたのね？　無理はしなくていいのよ、何も心配はいらないから今はゆっくり休んでちょうだい。家のこととか仕事のことは気にしなくていいから」

トレイに乗ったコーヒーカップとトーストの乗った皿をテーブルに置きながら話しかけた。だが詩緒の反応はない。どうしたのだろうと顔を覗き込もうとしたとき、さらに詩緒の顔が強張った。

「詩緒、どうしたの？　気分でも悪いの？」
そう言って手を伸ばし彼女の顔に触れようとした。その刹那詩緒の体がビクッと揺れたのを母は見逃さなかった。この子は何かに怯えている、そう感じた。

「――――詩緒？」
今度は慎重に言葉をかけた。だが黙ったまま動こうとしない。さらに近付きもう一度名前を呼ぼうとしたとき、かすかに詩緒の口が動いた。
聞き取れないほど小さな声だったが、それでも母を愕然とさせるだけの重い台詞だった。

「…あなた…誰…？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8889z/

MEMORY

2011年12月27日23時52分発行